

方言と星

星や星座を表す地方色豊かな言葉

大西拓一郎 Takuichiro ONISHI (国立国語研究所)

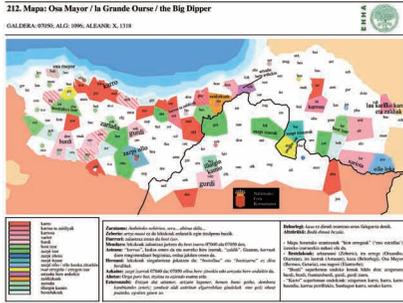


図1 バスク言語地図の北斗七星 (Euskaltzaindia, Real Academia de la Lengua Vasca 編、2008、Euskararen Herri Hizkeren Atlasa、212 図より)

日 本語方言の星に関する語彙を集成した資料としては、野尻抱影『日本星名辞典』(1973年、東京堂出版)、野尻抱影『日本の星』(1973年、中央公論社)、内田武『星の方言と民俗』(1973年、岩崎美術社)がよく知られている。本誌に執筆されている北尾浩一氏による一連の著作も大いに参考になる。それらを見ると、漁

業等の関係で沿岸部では航行の目印となる星、農業関係だと種まきや収穫の時期の目安となる星に関する語彙が多い。ところが、一定の星座(例えば、オリオン座)や星の並び(例えば、北斗七星)に対し、全国一律に語が当てられている例はほとんどない。ヨーロッパでは、北斗七星の並びなどは共通して認識されるようで、図1のような言語地図(バスク地方)もある。

太陽を表す日本語の方言については、図2の国立国語研究所『日本語地図』(251図)で全国分布が見られる。おおまかに言って、「天道」系の語(テントー・テイタ等)が琉球・北九州・中部・関東・南東北に、「日」系の語(ヒ・ヒサマ等)が南九州・四国・山陽・近畿・北陸・北東北に、「日輪」系の語(ニチリン・ニチリンサマ等)が中国・中部に、「太陽」系の語(タイヨウ・タイヨウサマ等)が山陰・中部・北関東に分布

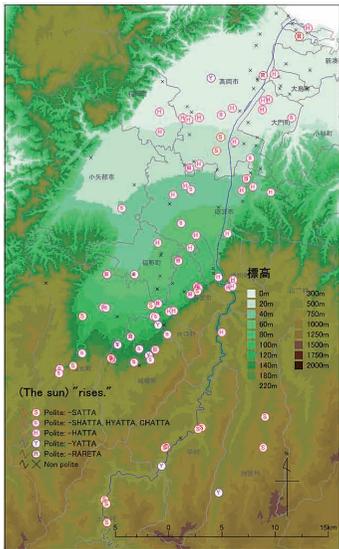


図3 富山県庄川流域における「(太陽が)昇った」の方言分布(筆者らの調査による)

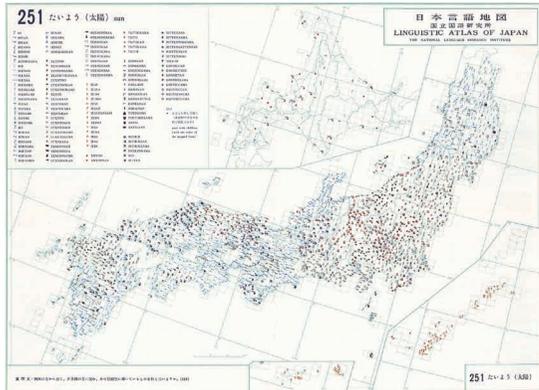


図2 「太陽」の全国分布(国立国語研究所編、1974『日本語地図』251図より)

で表すか、表す場合はどのような敬語が用いられるかを示した。ほぼ人間と同様の尊敬語で扱われている。今年、金環日食を日本の広い地域で見ることができて盛り上がった。『日本方言大辞典』(小学館)によると日食を表す方言語彙がある。愛媛県大三島のオカカリや南島(鳩間島・竹富島・新城島・石垣島・与論島)のティダノヤク類は「日食」を、香川県のオヒーサンガビョーキニナルや長崎県南高来郡のオヒサマンガイジャカルノマレラスは「日食になる」ことを、福島県会津・愛知県・広島県高田郡のオワズライは「日食と月食」を表す。病や厄などで表現され、あまり歓迎されるものではなかったことがわかる。

する。

語形に「サマ」のような敬称が付与されていることから理解されるように太陽を敬う地方は広い。図3には富山県庄川流域で太陽が昇ることを敬語